

第二期 第九十一号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024. 02. 10 定有堂書店 発行

本屋のパンセ

洋上での「転向」(二)

遠くの町日記

降る雪に想う胸突き八丁

本を作る側から (11)

人生で何度目かの、韓国との出会い

汽水のほとりから (35)

われわれにも罪はある

六花

鳥取あれこれ その九十

八代日記 (四十五)

ペラペラになりたいですか？

折り折りの記

奈良 敏行

岩田 直樹

鳥居貴彦

木元 健二

村瀬 謙介

高木 善祥

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

ドラメリア

本屋のパンセ

奈良 敏行

(定有堂 主人)

コロナ禍の最中「身過ぎ世過ぎは草の種」という文章を書いた。本屋全体の生成変化を一身に感じてのものだった。生計を立てる手立ては、草の根のようにどこにでもある、というのが直接の意味だ。

この生成変化に二つの局面を見た。一つは本屋がどんどん消えていく、しかし本屋的人間の実存は、この「本屋」という空間の消滅とともに終わるのでなく、終焉の前と後にも一筋の道としてつづくのではないだろうかという確信だ。もう一つは、従来「本屋業」とカウントされないような、ささやかな「本」のあり場も、本屋として現前化してきたことだった。本屋とはこれこれという既成概念がひっくり返り、これも本屋あれも本屋というふうな、主語と述語の転倒がはじまった。本屋はツリー状のものからリズム、草の種となった。

二〇二二年に、定有堂で「ドウルーズを読む会」がはじまったのも、そんな気分の後押しされたからだ。一つの星座

…… 編集後記



として見えていたものが、とき放たれ多様な星々となる。同一性から差異へ、固定的秩序から生成へ、規範から逸脱（規範の更新）へ、そんなものを概念として考えたかった。

定有堂の書棚には、自分の工夫がすみずみまでどこされ、一冊の本は「星座」として、関係性の中に本来以上の輝きの網の目となって、広がり息づいていた。閉店するということは、その星座が消えるということだった。モル状から分子状へと変化していった。定有堂という本屋は、定有堂という星座だったのだ。そこには星座の形で語られる物語があった。

前年の秋から二〇二四年にかけては、木田元の「反哲学」論を二十冊ほど読んだ。読書がここへと繋がったのだ。斬新だったのは、「哲学」というのはプラトンからヘーゲルまでの、いわば一つの星座だというおおきな理解だった。

「哲学」は「形」の時代の所産だ。「かたち」を追求する欲求は「反哲学」と呼ばれる。

本屋を始めたいけど、なかなか始められない人に、いままでたくさん会ってきた。話をしていると、その情熱ゆえに、「すでに本屋なのではないか」と感じることも多かった。なかなか始まらないで、準備中がつづいているというだけだ。「本屋」であることを主として考えるのではなく、人つまり「本屋の人間」という「なりゆく」姿に付き合っていきたいと思っ

た。「身過ぎ世過ぎは草の種」という言葉は、コロナ禍の時代、そしてその時代以後「本屋」という「形」からとりこぼされていく本屋の人間へ投げかける覚醒の言葉だった。本屋という「形」は消える。でも本屋という「かたち」はリゾームのように根を張っていく。

「哲学」の時代は「倫理」の時代だ。違うことをいつてるようだが、それは正しい。本が好きというのは本の中の世界と自我がシンクロナイズしている事象だ。ここでの量的な蓄積がある日質的に高まり、初発衝動として駆動する。つまり、本が好きだが、本を売るのはもっと楽しい、という気づきだ。自我の拡張からはじまる他我との出会いがある。この視点にいたり本屋の人間という世界が開ける。本が好きなのは自分の趣味だが、本を売るのは社会的な行為だ。自分の好みに代金を支払ってもらえる。自己承認の欲求として、これほどの喜びはない。

人と人がつながる（ノエシス）ところに、真・善・美が存在する。それ以外の関係の外部には、とき放たれた野生の猛々しさがひろがる。本のない世界は好きではない。関係性の中に存在する故、「本屋」の中のすべての本は倫理的だ。これは本屋の人間の確信だ。

「反哲学」は倫理の枠をはずしていく。人為（ノモス）と自然（フェシス）の交代だ。星座に星々の世界だ。「本屋」とい

う星座を失い、星々の中で生きいけるだろうか。この事態を生成変化の組み替えにとらえよう。本屋的人間としてどのように生成変化していくか。「反哲学」と「反本屋」、星座なき星々への踏み分け、そんなことを考えている。考えるとは概念を生み出すということだ。「本屋」未然、以後の本屋の人間を「本屋浪人」と呼ぼうか。そして従来本屋にカウントされなかった新しい生成を、「浪人本屋」と呼んでみたい。ここに生成変化の組み替えが鮮明に見えてくる。浪人の時代がはじまっているのだ。「草の種」へと帰って行きたいと思う。

2024.01.17

木田元 『現象学』 岩波新書 1970

木田元 『現代の哲学』 講談社学術文庫 1991

木田元 『ハイデガーの思想』 岩波新書 1993

木田元 『現代哲学の岐路』 講談社学術文庫 1996

木田元 『反哲学史』 講談社学術文庫 2000

木田元 『木田元の最終講義』 角川ソフィア文庫 2000

木田元 『哲学と反哲学』 岩波現代文 2004

木田元 『ハイデガー拾い読み』 新潮文庫 2007

木田元 『反哲学入門』 新潮文庫 2007

木田元 『わたしの哲学入門』 講談社学術文庫 2014

木田元 『哲学散歩』 文春文庫 2017

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

2月20日 火曜日 19時から

テキスト 國分功一郎『目的への抵抗』 新新書

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

2月1日 木曜日 19時から

テキスト 木田元『反哲学史』 講談社学術文庫

副読本・木田元『反哲学入門』 新潮文庫

定有堂教室「読書室ビオトープ」小説を読む会です

2月9日 木曜日 第8回 19時半から

テキスト 川上弘美『某』 幻冬舎文庫

太極拳教室(会場 定有堂三階・他二カ所) 葉香クラブ

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 産業体育館

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(ナラ)

三段 公認B級指導員(みちる先生)

奈良敏行＋三砂慶明編

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円 6判上製

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024.2



【内容】

本は、本屋は、これからも大丈夫——そのように思わせ
てくれる一冊である。

本屋「Title」店主・辻山良雄さん推薦！

鳥取の定有堂書店は、いかにして地域の文化拠点となり、

日本中から本好きや書店員が足を運ぶ「聖地」となっていたのか。名店の店主が折に触れつづった言葉から、その軌跡が立ち現れる。〈本の力〉が疑われる今まさに、手に取るべき一冊。

鳥取に根を下ろし、一から自分の仕事を作りあげてきた奈良さんの言葉には、時代と地域を超えた普遍がある。それはとてもシンプルなことだ。「本が好き、人が好き」。いつの時代も定有堂書店は本と人とのあいだにあり、そうした素朴なスピリットが、その店を全国から人が集う「聖地」たらしめたのだ。

いま、本の力を疑いはじめた人にこそ読んでほしい。本は、本屋は、これからも大丈夫——そのように思わせてくれる一冊である。

本屋「Title」店主・辻山良雄

人生のあるとき、立身して生きるか、それとも「自分らしく生きるか」の岐路に立つ。でも自分らしく生きるには才能がいる。芸術家なんかそうですよ。私は本が好きで、ただで才能もない。でも好きな本からは遠ざかりたくない。そんな時、「本を商う」という選択肢があったことがとてもうれしい。

「小さな商い」はとてもビューティフルなものだ。ここが始まりで、ここが終わりという性質の、さきやかだが至福の場所なのだ。
(本書「本屋の学校」より)

【内容目次】

はじめに 身過ぎ世過ぎは草の種

第一章 町の本屋という物語

楽しい本屋は可能か／“夢を託す”ということ／どうして素人が書店を始めることになったかと言うと……／日常の可能性／本のことは井狩春男さんに教わった／本を並べる／本屋の愉しみ／ブック・カバーへの思い入れの話／定有堂から／人文書で、もうおともだち／町の本屋の物語

第二章 「書店」と「本屋」

「本屋」論／ザ・ブックマン／本屋は「舞台」なのだ／本の紹介は楽しい／本屋のカスタマイズ／「本屋アジール」論／本の泉／「書店」と「本屋」／ウェブ、そして町の本屋／町の本屋から生まれた本——『伝えたいこと』出版のこと

第三章 「身の丈」の本屋

人に教わり、本に教わる／座敷わらしの荒ぶる魂／本屋の学校／本屋を歩く／なぜ人文書なのか／本屋ですから／希望／本屋の源泉／スタンダードとカスタマイズ／京都書店研修会へいく／永六輔さんトーク&サインの会顛末記／朋有り遠方より来る／ノアの箱舟／バーチャル書店／町の書店に未来はあるか

第四章 本屋の青空

書と戯れる／就職しないで生きるには／脱個性／徳儀／一周遅れのトップ／書の底力／町に生きる／再生力／本屋と個性／本のビオトープ／好きだからやる

第五章 定有堂書店の生成変化

本屋の未来を創造する／定有堂書店の生成変化

附録 定有堂書店の本棚 往来のベーシックセオリー

あとがき 一冊の本の衝撃

編者後記 三砂慶明

奈良敏行・定有堂書店略年譜

以上、作品社案内より引用

えっ、あと二ヶ月もないのですが……

— 洋上での「転向」 (二) —

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人)

二 船に乗るまで (一)

四〇年前のことだから思い出すのは厄介だ。意外なことに記憶がよみがえってきた。そうなる、船に乗るまでがやたら長くなってしまふ。

一九八四年二月末だっただろうか。同郷のご夫婦宅の二階に間借りしていた私を、一階から奥さんが「大学の先生から電話ですよ」と大声で呼ぶ。

お子さん二人とも就職や結婚で実家を離れたので、知り合いの息子(私)を受け入れてくれたのだ。銭湯がすぐ近くにあったのだが、風呂を使うことができたのは金銭面を考えるととてもありがたかった。トイレは共用、食事はなし。下宿人はもう一人、北陸出身の浪人生で駿台予備校に通い医学部を目指していた(無事に地元大学に合格)。

ユニットバス完備のワンルームマンションが当たり前の現在から見れば、いかにも「昭和」だ。

通っていた大学は今では関東圏以外の出身者が減っているが、当時は私のような田舎出身の貧乏学生が多く、周囲の友人に聞く限りは似たような下宿環境だった。上京した同級生でワンルームマンションに入居したのは、私大医学部のA君と一族が地元で手広く商売をしているB君だけだった。私が住んでいたのは瀬東(隅田川の東のこと、永井荷風「瀬東綺譚」は今でも大好きだ)の下町で、芭蕉庵があつたり、どぜう(どじょう)やさくら肉を食べさせる店があつたり、ドラマや映画に出てきそうなくつも橋があつたり、とたいそう気に入っていた。

二年後、大家さんが東海地方に就職した親孝行の息子さん夫婦の近くに引越すことになり、大学敷地の端まで徒歩五分の谷中墓地に隣接する下宿に移った。窓を開けると見える墓地は異次元の空間のようで楽しかった。夕方になると三味線の音が聞こえてくるのは粋だった。呼び出し電話もなかったから、卒業アルバム委員の友人が卒アル撮影の連絡のためにわざわざ電報を打ってくれたのは懐かしい思い出である。

私は一月中旬に卒業研究(プレートテクトニクスの末端の末端のそのまた末端)を提出し、四月から大学院に進むことになっていた。三本五〇〇

円の名画座へ行ったり、とりとめもない読書をし
たりとのんびり過ごしていたはずである。

そういえば、鳥取の知人のおつてで小学五年生
手に中学受験（中堅の名門中学）の家庭教師も
していた。中学受験があること自体、公立保育園・
小学校・中学校・高校を経た私にとって衝撃だっ
た。それまでも高校受験（私でも名前を知って
いる有名私学）、大学受験の家庭教師もしたが、
全員が第一志望校は不合格だった。そんな私が、
高校で進学指導を担当することになるとは。

どんな本を読んでいたのだろうか。高校時代か
ら小説は好きだった。高校一年で国語を教わった
古田恵紹先生の影響だった。先生は広島県境に近
い寺の息子で、跡を継ぐのが嫌で仏教を学ぶと言っ
て早稲田大「仏」文科に進んだ（父親はそんな嘘
を見破っていた）。小説家になりたかったので大
先輩の丹羽文雄に教えてもらったこともある。井
伏鱒二に原稿を送ったが、「やめた方がいい」と
いう趣旨の返事をもらったらしい。

高校入学直後から半年間は、ご自分の小説とレ
ジスタンス運動の金字塔であるヴェルコール『夜
の沈黙』（岩波文庫）をひたすら読んだ。先生の

小説はともかく、『夜の沈黙』は圧巻だった。そ
の後、岩波文庫や新潮文庫に入っている日本文学
や海外文学の名作をつまみ食いするようになった。

高校一年の後半ずっと、先生が研究中の「因伯
俚言」の講義で、とても面白かった。

大学に入っても、小説のほかは専門書しか読ん
でいなかった。一九八三年、浅田彰『構造と力』
が大ベストセラーになる。大学生協書籍部で平積
みどころか山積みになっている光景を見て、「哲
学って何？」と好奇心が湧いてきた。『構造と力』
を立ち読みしても、日本語自体がわからない。

卒研提出後しばらくして、何か読もうかな、と
哲学コーナーの棚を眺めているとベルクソン『時
間と自由』が目にとまった。ノーベル文学賞受賞
と経歴にある哲学者だから、内容も文学的で読み
やすいのだろうか。呼び出し電話があったのは、
ちょうどその頃である。電話に出ると、助手さん
（二〇〇七年度以降は「助教」）だった。

「四月下旬から海洋調査に行くので頼むよ。パ
スポート持ってるでしょ」「そんなの持ってる
ん。あと二ヶ月もないのですが……」

遠くの町日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

高知にいるというKさんから電話がかかってくる。海沿いのバス停でバスを待っているところだと言う。バスはまだ来ないらしい。「教えてもらった道がとてもよかった」と彼女はいった。高知に行きたいと言う話をずいぶん前に聞いて、どこに行けばよいかとのことだったので通っていた大学の前の道を教えたのだった。そこは車二台が楽にすれ違えるくらいの幅の道路で、路線バスや自転車の人も朝方には割と通っている。居酒屋とか散髪屋、小さな病院がぼつぼつと軒を連ねているが特に賑わっているわけではない。アスファルトで舗装された生活道路。ただ一つ他と違うのは、路面電車が走っていること。電線が引かれ、鉄道の線路が敷かれている。車と自転車と人ならまあ狭くもない道に電車が来るとちょっと話が違ってくる。景色に不釣り合いなサイズの電車が向こうからゴトゴトとやってくる。車は道をゆずるしかない。歩く人は家の軒先に入ってやり過ごす。駅は地面に白線が引かれただけの空

間だ。道の真ん中に突然現れる電停。電車を待つ人たちは自動車販売店の横のちよつとしたスペースやタクシー会社の軒先なんかに立っている。みんな当たり前のような顔をしてデカすぎる電車が走る道路を歩いたり走ったりする。夕方になると焼き鳥屋がものすごい煙を道路に流し始める。その煙をかき分けてデカすぎる電車が走る。電車もすごい煙もすごい。ずっとめちやくちや変な光景だなと思っていた。路面電車が走る街ってこんなもんなんだろうか。広島や岡山や長崎の路面電車を思い出してみるが、もうちよつと電車は電車らしい顔をして走っていた。大学に通っていた四年間、ほぼ毎日その道を通っているとだんだん気にならなくなっていった。でもやっぱり思い返すとあの道へんだよ。道のことを話すとき、電話の向こうでKさんも少し声が大きくなっていった。やつぱりへんな道だった。十何年ぶりにへんな道がへんな道と認められた。「あ、バスがきました」とKさんからの電話は唐突に切れた。

和歌山からイハラさんがやってくる。前の日に電話があったのでそわそわしている。通りの向こうから豪快な笑い声が聞こえる気がする。きつとそうだと思っていいたらやはりそうだった。イハラさんは相変わらず元気で「うちはもうアカンよゝわぎわぎくる人なんていないもん」と笑う。

「奈良さんが辞めたでしょ。だからわたしも流行りにのろうかと思って」とかいう。イハラさんの店に行ったときのことを思い出そうとするがなかなか思い出せない。マヨネーズやサラダ油が並ぶ本屋。店を出て温泉にいったことはよく覚えている。イハラハートショップからさらに山奥に入ったところにある温泉で、混浴の露天風呂につかっているとおばちゃんの集団が入ってきて大変な目にあつた。そんなことを思い出しているうちにイハラさんとその友人はわいわいと本棚を眺め、「こんな本知らんわ〜」などと賑やかに買い物をして帰っていった。あの日、山奥の本屋であなたがあまりにも楽しそうに仕事をしていたから今の自分はある、と伝え損ねたなと思うが別にそんなことは言わなくてもいいのかもしれない。

元日の午後。京都の家も不気味にゆらゆらと揺れた。テレビの向こうの景色を見ながらそこに住む知人たちの顔が浮かぶ。神戸で大きな地震があつたのはちょうど僕が息子くらいの歳だった。暗い部屋とヘリコプターの音。電気がついてからテレビで横倒しになった高速道路をみた。東北で地震があつたのは大学を卒業する年の春休みだった。遠くに映される燃える町。どちらも知らない町で起こった遠い出来事だった。いま、津波です！と叫ぶアナウンサーの

声を聞きながら、富山駅から電車に乗って行った海岸を思い出している。なぜか砂浜にはクルマがたくさん落ちていた。釣り人がちらほらと竿を下ろしていて、浜からすぐのところには民家が並び、洗濯物が干してあつた。あのたくさんのクルマは今どうなっているだろうか。遠くの知らない町ではなく、クルマの落ちている海岸とそこで暮らす人たち。

「開風社 待賢ブックセンター」
京都市上京区大宮通樫木町上る菱屋町818

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
の再解釈
岩田直樹

岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
—生活世界における公共性と倫理—』小取舎 2023

一八〇〇円本体

降る雪に想う胸突き八丁

木元 健二

(新聞記者)

一月の寒波に見舞われ、ここ松江でも三十センチ近く、雪が積もった。私は二^キ先の訪問先まで歩くのに、一時間ほどかかった。しんしんと降りつもるなか、自家用車に乗る気はしない。強風のなか傘をにぎりしめ、長靴を履き、雪の浅いところを選びながらモサモサ歩いたのだが、途中、小さな用を足すための時間も生じ(※ちゃんと公衆便所に寄りたり)、なかなかたどり着けなかったのだ。

雪化粧、雪明かり、雪見酒……。雪のつく言葉には情緒を感じてきた。ただ慣れぬ者が雪の降る所で暮らしてみると、避けがたい不便を伴うと痛感する。これから雪の日は普段の倍、歩くのに時間がかかるものと思わねば。同じ山陰・鳥取の旧友は「冬は雪が降らねば、物足りんなあ」と平然と言っていた。ニュータウン育ちのあまちゃんとは、どうも気構えが違うようだ。

二十歳の頃、山登りをかじったことがある。思い立ち、

秋に大学の山岳部に入部して手ほどきしてもらい、奈良の大峰山などに行った。ただ山道をゆくのも新鮮で、今にしてみれば行楽気分も混じっていた。

若かったとはいえ、クライマーになるうなどという野望はなかった。ただ当時は浮かれたバブル全盛期。登山や冒険といった行為に硬派なロマンを感じていた気がする。

植村直己の著作がとりわけ好きだったせいもあるかもしれない。世界初の五大陸最高峰登頂を果たし、単独で犬ぞりによる北極点到達にも成功した人物だ。イヌイットと同じように、生肉でまかなう食事。その日の行程を終えテントに入ると、雪を溶かして紅茶をわかす。溶けなくなるまで砂糖をぶちこみ、冷え切った体を温めるのだとか。雪原のなか、近くにひそむシロクマへの恐怖。ついに仕留めたが、解体するとやせ細っていて、飢えていたことを目の当たりにする。そうした極限の記録は、読んでいると時を忘れるほどおもしろい。

さて、その年の冬を迎え、新入りの私も信州の八ヶ岳に向かうことになった。長野・茅野に降り立ち、仰ぎ見た雪山。今見れば、それは何とも美しいものだろう。ただ、その時はそれどころではなかった。

背負わされた荷が肩に食い込んだ。テントなどの装備

や山行での食料など同行した数人で分担したのだが、ザックを計ると四十[＊]ほどあったと記憶する。

「ラッセル」という方式で深い雪をかき分け、踏み固めて道を作りながら、ひたすら山を登ってゆく。縦列になり、トコロテン式に順番を回すのだが、一番苦しい先頭になると、すぐに息が切れ、目から火花が飛ぶほどしんどい。しかも日にちが経つほど、テントなどが雪の水分を含み、背負う荷物がずっしりと重くなってくる。寒くてあまり眠れず、早朝からの行動に疲労がずんずん積もる。

幾日目に腰がひどく痛くなり、ついに私は「もう歩けません」と訴えた。下山するまでもとも持たない気がした。浜田さんという先輩が見かねて私のザックからいくつも荷を取り出し、たくさん持ってくれた。高知出身で武骨な人だったが、優しい人だった。

「しゃーないがよ」

土佐なまりでぼつんと言われた。それが弱った心に染みて、不覚にも私は涙した。ここはこのまま雪の斜面を登り続け、ただ下山することを目指すしかないのだ。何はともあれ行程を終えた時、私の安直な登山へのあこがれは、淡雪のように消えていた。

昨年末、やはり雪が積もった日、出雲大社と松江市内な

どを結ぶ「一畑電車」が催す体験運転の取材に行った。昭和四年製。日本最古級の電車を運転できるとあり、首都圏や関西からの参加者が引きも切らない。

雲州平田駅の構内の、専用線百二十^リを往復する。スピードは十数キロではあるが、車体は三十三^トある。いったん走り出すと、疾走感に包まれる。

発進から停止位置に至るまで三十秒ほどに過ぎないが、この間、いくつもの手順をこなさねばならない。年代物の電車ゆえ、すべて手動だ。左手の操作で加速させ、右手でブレーキ弁を操作する。この加減の仕方が実に微妙で、所定位置に止めるのが難しい。頭で考えるようには到底停車できなかった。

動き出せば、あとは自分で行うしかなく……。

このふいにきっぱり迫られる感覚は、八ヶ岳登山の記憶と重なる。そうした急場は、私のクラブ活動のような「余暇」の場面に訪れるばかりでない。

職場でも、何げない行動の先に腹をくらねばならない状況が待ち構えていることがあった。そんな局面が案外人生の曲がり角になったりする。だからといって、極楽トンは突風に備えられない。

本を作る側から (11)

村瀬 謙介

(小取舎)

昨年一二月一七日に神戸に行ってきた。小取舎から出た本『ヒゲ面の元ママ』お互いの違いを尊重し合える優しい世界の形』の出版記念パーティーにお呼ばれたのだ。著者の河本直氏が一〇月に立ち上げた一般社団法人 Jazo (ラソ)の事務所が神戸にあるのでその設立記念も合わせてのパーティーで、新神戸駅に近いANAクラウンプラザホテルの会場で行われた。河本氏のご両親はもちろん、この本の帯文を書いていただいたベストセラー占星術師、かげした真由子さんや、本書内の写真を撮っていた方、私を含め鳥取からの参加者もいて、涙あり笑いありの終始和やかなパーティーだった。出版記念パーティーの「ああ、これこれ!」という感じ。東京の大手出版社さんが行う雰囲気(メディアで見たことがあるだけ)でとても高揚感に包まれた。出版社代表としての挨拶もウケたし。

本来は出版記念会は出版社が企画するものである。これ

まで著者や関係者の方と出版記念会と称した「打ち上げ」を居酒屋で開催したことはあるのだが、小取舎という出版社でありながら出版記念パーティーなるものを初めて経験した貴重な一日だった。そもそも小取舎を立ち上げた当初から昨年五月に五類になるまでコロナ禍だったので大体的にパーティーは行えず……。講演会やサイン会なども本を売るきっかけになるが、やはりパーティーの方が楽しい。著者以外に本の出版に携わった様々な人の裏話や、本の感想が聞けるというのも講演会やサイン会ではできないこと。著者と読者を結びつける(しかも顔が見える!)出版記念会の重要さを改めて感じた。

さて、前回の音信不通の特集が「わたしの定有堂」ということで皆さんが書かれていたのだが、その内の何名かが定有堂の異質な書棚展開について言及されていた。大阪に住んでいた時に二年くらい書店員をしていたし、他店にももちろん足を運んでいたが、同じ本を飛び飛びに棚に挿すという置き方は言われてみれば確かに異質だ。多くの書店は平置きや面出しの期間を過ぎ、棚差しになった本の置き場所は、棚に一冊、残りを棚の下の引き出しにストックしておくことが多いだろう。なのに同じ本をこちらの棚にもあちらの棚にもおくとという手法。鳥取市末広温泉町にあ

るロコトというバーはカウンター後ろの棚にびっしりレコードが収まっている。お客のリクエストにすぐに応えるので一度「どういう配置で置いているのか」と聞いたことがあるが、「もう自分の感覚の中での関係性でまとめている」という。小さな書店もそうで、本と本が、ジャンルや出版社の垣根を超えて近くに置いてあるのは楽しさを感じるし、そこに店主の一言があればもう買ってしまう。そうやって本が増えていってしまうのだが。

小取舎の本を取り扱っている書店さんでは郷土本のコーナーがあったり、そうでなくても目立つところに置いて下さったり、ポップをわざわざ作ってくれたり大変感謝している。だが、最近ふと思うのが、どのくらいの人が郷土本のコーナーに行くのかということ。図書館でもそうなのだが、本を探しに行く動線はわりと決まっていたりする。音信不通の読者はその動線自体が広いと思うのだが、一般的なお客は自分のよく読む本の棚にしか行かないイメージ。昨年小取舎が出した本でいうと『前進』は碧川かたの生涯を描いた作品なので郷土コーナーで良いと思うのだが、『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』は郷土コーナー以外に人文や哲学コーナーにもあって良いし、『闇の中に灯りを』は教育分野の棚にあっても良い。前述した『ヒゲ面

の元ママ』がLGBTQだけの話では全くないので、教育や自己啓発など色々なジャンルの棚に置いてほしいと欲が出たのです。すみません。

郷土コーナーにも置かれて、尚且つジャンルの棚にも置かれるのが良いと思うのだが、そんなことをやっていたら棚卸しが大変すぎる。結局のところ、どこにどの本があるのか書店員が把握できている書店が一番だと思う。

ここまで書いてきて、郷土本に興味を持たれる方を増やした方が早い気がしてきた。地元の著者や地域に焦点を当てた本を読むことにより、地元についての理解が当然深まる。地域の文化や歴史、特徴を学び、共感することができる人を移住者も含め増やすことができる。さて、どうしようか。



人生で何度目かの、韓国との出会い

高木 善祥

(sheepsheep_books)

音楽好きな母は演歌を嫌っていたが、チョー・ヨンピルは好んで聴いていた。日本だと演歌歌手の部類に入と思うが、韓国では「国民的なスター歌手」。公式のYouTubeチャンネルでは、つい最近開催されたスタジアムクラスのコンサートもアップされている。ほかにも桂銀淑やテレサ・テンもよく聴いていた。「東アジアにおける大衆歌謡の受け止められ方」について、いまでも折に触れ考えてしまうのは、子供のころからの刷り込みだろう。

小学校で、一学年下に李君という男の子がいた。水泳部の後輩で、なぜか気が合った。別の中学校に行ったのか、日本を離れたのか、その後のことは分からない。

高校の同級生、T君は天然の愛されキャラだった。北海道の大学に進学したのは知っていたけど、それから三〇年近く所在が分からなかった。しかし、2カ月前に別の友人と

久しぶりに飲んでT君の話題になったときに、居酒屋のマスターが「こつちには戻らず、そのまま北海道で暮らしている」と教えてくれた。聞けばT君の弟と同級生で、幼いころはよく遊んでいたそうだ。家業を継がなかった彼の話を聞いてみたくなった。ついでに鳥取の狭きにも驚かされた。

大学の同級生に、韓国好きな男の子がいた。日常会話は普通にこなせるレベルで、長期休みのたびに遊びに行っていた。九〇年代初頭なので、音楽やドラマが流行っていたわけではない。そこまで親しくなかったたので、この話を聞いたときも「ふーん、珍しいな」くらいの反応しかできなかったけど、彼のことはなぜか今も覚えている。

アジア映画にも関心が広がって、四方田犬彦の本を読むようになり、平凡社ライブラリーの『われらが〈他者〉なる韓国』を手についた。一九七九年、特に思い入れのないまま日本語教師として韓国に渡り、そこで見聞きしたことを書いたエッセイ。同僚や教え子たちと飲みかわしながらも、あえて踏み込まない距離の取り方に、日韓の歴史を思う。

一度だけ韓国に行ったことがある。前職で視察メンバーに選ばれ、当時の会長と同僚と一緒に、いくつかの出版

社や教保文庫をおとずれた。観光客が来ない地元の焼肉屋さんに連れて行ってもらい、たまたま隣の席にいた日本語を勉強している学生さんたちも交えて、楽しい時間を過ごした。帰りはドタバタしていてお土産を選ぶ時間がなく、空港で缶入りの韓国のを一〇個まとめ買いしたら、税関で不審がられたのは、良い思い出だ。

二〇一〇年、世の中は第二次KPOPブーム。友人に教えてもらったガールズグループ、2NE1に衝撃を受ける。音楽もビジュアルも完璧だった。ただしほかのグループに派生することはない、KPOPへの興味も続かなかった。

それから一〇年後、SNSがきっかけで韓国のインディーZやR&Bにハマリする。レーベルやディストリビューター、アーティスト同士のつながりをひたすら掘り続ける日々。気に入った新譜をスポティファイで月ごとにプレイリストにする作業を始めて、四年目に入った。リスナーは三人くらいだが。

で、ハングルの勉強を始めた。入門書を何冊か買って、とりあえずハングル文字の読み方を覚える。その後はあまり進んでおらず、アプリで毎日二〇分程度。身に着いた感覚はなかったけれど、SNSでフォローしているアーティ

ストの「土曜日午後八時にソウルでライブ」という投稿が、スルツと頭に入ってきた。

音楽を聴いたりドラマを観たりしていて、知っている単語がたまに聞き取れるとちよつとうれしい。さきやかな成長を、日々楽しんでいる。

テキスト

『マンガでわかる！二時間でハングルが読めるようになる本』 チョ・ヒチョル（学研）

『一日たったの4ページ！やさしい基礎韓国語』秋山卓澄（HANNA）

『改訂版HANNAの韓国語単語（入門・初級編）ハン検4・5級レベル』ミリネ韓国語教室（HANNA）

小説

『ビョンナムオッパへ 韓国フェミニズム小説集』チョ・ナムジュ他（白水社）

『82年生まれ、キム・ジヨン』チョ・ナムジュ（ちくま文庫）

汽水のほとりから (35)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

雑誌『スペクテイター』が「文化戦争」を特集している。

「いま、なぜ、文化戦争か？」と題された巻頭文によれば、文化戦争 (Culture wars) とはアメリカ社会で「絶対的な価値観をめぐって賛否が分かれ、互いを攻撃し合うこと」だが、それは対岸の火事ではない。文中にも「個人の自由、権利、平等といった大きな概念をめぐる『文化的な』論争が、ここ日本でも、キャンセル・カルチャー、ポリティカル・コレクトネス、アイデンティティ政治などの新語と共に繰り広げられている」とある通り、我々の問題でもある。

今回はポリティカル・コレクトネス (Political Correctness 以下、PC) について考察したい。60年代から70年代のアメリカ社会における反戦・反差別に関する市民運動で、前衛的な左派が古臭い左派や右派を批判する言葉として用いられたのがその由来のようだ。が、90年代になると、そうした風潮に強く反発した人たちによって

逆にこれを批判する文脈で使われ始める。日本への輸入はそれ以後で、略語の「ポリコレ」もほぼ同じ意味で使われている。

PCは不当な差別の問題である。「差別は許さない」という左派の言説は、もともと右に述べたような市民運動によって可能になったものだ。が、そのように誰もが差別を批判できるようになったのは実はつい最近のことらしい。批評家の綿野恵太によれば、そこには「アイデンティティ」から「シティズンシップ」へという反差別の言説を支える論理の転換があったという。かつては差別を受けた当事者 (被差別者) だけが批判できるという「アイデンティティ」の考え方が支配的であったが、市民であるならば当事者／非当事者を問わず差別を批判できる (してもよい) という「シティズンシップ」の考え方に転換したというのだ。 (『差別はいけない』とみんないうけれど。『平凡社』)。

綿野は言う。「シティズンシップの論理は、非当事者をふくめたみんなが差別を批判できる状況をつくった。しかし、いっぽうで差別批判を『炎上』という娯楽にしてしまったといえる。(中略) しかし、本当に差別者だけが悪なのか。私たちだけが善なのか。シティズンシップの論理は、もしかしたら差別をしているのかもしれない、とみずからに問いなおすこと、差別とは何か、と考えるきっかけを

失わせている」と。とはいえ、「シティズンシップ」の論理だけが悪いのでもない。SNSは匿名性が高く、当事者の立場から「アイデンティティ」の論理を振り回して相手にマウンティングする場合も多いだろう。いずれにしても相手の顔が見えず、対話が成り立たないのが問題である。

ところで、右の綿野の立論で興味深いのは、反差別言説を支える「アイデンティティ」と「シティズンシップ」の二つの論理をドイツの法学者カール・シュミットの理論によつて整理していることである。リベラル・デモクラシーとよく言うが、シュミットは「自由主義」と「民主主義」を異なる政治システムとして峻別した。彼の説によれば、多様性を前提とした個人が市民として政治参画するのが「自由主義」であり、一方、多様性よりも共同体の同一性・同質性を担保するのが「民主主義」である。ファシズムは、それ故に後者の一形態と言える。この観点から反差別言説を支える二つの論理を読み解けば、「シティズンシップ」は多様性を主張する「自由主義」に、「アイデンティティ」は同一性・同質性を唱える「民主主義」にそれぞれ属する。問題は、自由主義の多様性と民主主義の同一性・同質性は決して克服できない対立だとシュミットが指摘した点で、綿野もこの指摘は現時点では正しいだろうと述べている。

シュミットの理論を差別問題に応用するアイデアには先

例がある。結秀実『「超」言葉狩り宣言』（太田出版）がそれで、そのことは綿野も指摘している。結（すが）

は文藝評論家だが、一九六八年に象徴される新左翼の全共闘運動において差別の問題がいかに重要だったかを論じた人でもある。日本のPCの原点はここにあるだろう。実はそのことを論じようとして、これを書き始めたのだった。

思うに、新左翼の戦後民主主義批判もまた、先に述べたシュミット理論による「自由主義Ⅱシティズンシップ」と「民主主義Ⅱアイデンティティ」の対立から説明できる。新左翼の学生は前者の論理から後者の論理を批判したと考えられるからだ。が、その彼らの批判は、在日朝鮮人・中国人の学生による民族差別の告発によつて逆に批判に晒される。これを真摯に受け止めたのが全共闘の学生で、彼らは日本人という自身の「アイデンティティ」を、その差別性ととともに、突きつけられる結果となったのである。

結秀実によれば、一九六八年に象徴される全共闘運動がそれまでの新左翼とは決定的に異なるのはこの点である。日本のPCの原点はここにある。が、そこで提起された問題は、半世紀以上経った今もまだ、未解決のままである。

われわれにも罪はある

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

昔勤めていた新聞社が、再来年春に復刊から五十周年を迎えるというので、ひょんなことから社史の編纂(きん)を手伝うことになった。会社の敷居はもうまたぐまい、と思っていたが、五十年のうち四十年弱も在職していたのだから、まあ、仕方がないか。昔のことを知っている人も少なくなった。

倉庫から古い新聞を引っ張り出して眺めていると、ふと二十六年も前に私が書いた論説記事が目に残った。「パーティーの中で死ぬ政治―政党助成金に異議あり」(1998年9月20日付)

◇ ◇ ◇
「『政党』のことを英語で『パーティー』というのは、出来過ぎたジョークかもしれない」。そんなシニカルな書き出しで始まる記事は、リクルート事件(88年に発覚し

た戦後最大の政官財の贈収賄事件)などの反省から、政治資金規正法や「税金で政党を養う」政党助成金まで設けながら、「すでに骨抜きの状態ではないか」と断じている。以下、記事から。

◇ ◇ ◇
「先日公表された97年の政治資金収支報告書によると、政治資金パーティーの収入は百二十一億六千七百万円、前年比二〇・六%の大幅増で、パーティーが資金集めの柱になりつつある。

ホテルの会場代など三百万円余りの経費で一日一億円以上の荒稼ぎができる(中略)買う側も、政治献金のように企業名が表に出ないので都合がいい。形を変えた企業献金、これが政治資金規正法の『抜け道』になっている」

「裏金問題」を論じる近ごろの新聞の論説記事とまるまる同じではないか。さすが、ヒューヒュー、やるなあ、四半世紀も前の私(笑)。

ところが当時の私は「政党の墮落は、パーティーによる荒稼ぎより、もっと根深い問題がないか」と、さらに突っ込んでいる。裏金の報道合戦に明け暮れる昨今のメディアもあまり取り上げない「政党助成金」の問題である。

◇ ◇ ◇
「パーティー収入の二・五倍、政党収入の大部分を占

めるのが政党助成金(三百億千三百万円)。各党の公費(助成金)依存度は年々高まっている、自民党は全収入の六〇%、民主党は四九%、機関紙収入でまかなっている共産党を除き、気が付けば、政党助成金という『生命維持装置』を断たれたら、日本の政党は一日も生きていけない。寒々とした政党政治のたそがれだ」

記事はここで高校のクラスメートだった山口二郎北海道大教授(当時)を取材した際の、「日本では市民政党が一向に育たない」という嘆きを紹介している。

「与党の利権に寄生したり、企業・労組に依存する党ではなく、政策を支持する個々人の寄付で運営される政党が育たないことには、日本の政治の根本は変わらない。でも私は今、悲観的だ」

その後、自民党の野党転落、山口が政策ブレンだった民主党への政権交代も起きたが、日本の政党政治は結局「裏金事件」に象徴されるように、少しも前に進んでいなかった。いやむしろ、「派閥解散」などと本筋から外れたご都合主義でお茶を濁し、メディアもそれに引きずられている有様は、二十六年前より深刻かも知れない。

◇

◇

◇

昔、カミさんの葬儀に、地元選出の国会議員の皆さんの押し花入りやら豪華な弔電がたくさん届いて驚いた。義父

(カミさんの父親)の葬儀には国会議員の地元秘書が線香を上げに来た。「あの〇〇議員の秘書(時には議員本人)が来たで」というのが、どうやら地方の人間にとって「ステータス」らしいのだ。

これら日々の弔電代、弔問する地元秘書らの給料を積み上げたなら、それだけであつという間に膨大な金額になるが、手を抜けば「なんだ、あの議員は」となる。「政治は金がかかる」と議員らがごぼす「政治活動」の中身とは、たぶん、こんなものではないか。

裏金に腹を立てるのもいいが、罪や責任は政治家だけでなく、支持の見返りに常に「いくばくかの恩恵」を彼らに求め、「陳情政治」をはびこらせた、われわれ地方に住む有権者たちにもあるだろう。

持ちつ持たれつの「領民」ではなく、自立した「市民」へ。われわれの側が変わらなければ「市民政党」など永久にできっこない…というのが二十六年後に見えて来た結論だが、山口教授と同様、少々私も悲観的である。

六花

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

雪が降れば思い出す 一

新潟県出身の友人がいた。それも、日本有数の豪雪地帯T市である。先ず、家並みが不思議である。家が下駄を履いている…ように見えた。大半の家が三階建、そして二階に玄関がある。一階部分はガレージか物置という仕様だ。それくらいの雪は当たり前に降る、ということであろう。何せ、電信柱を跨いで歩く、という土地柄である。

ある時、

「ずいぶん降るんだろう？」と問うたら、

「いや、大したことないよ」と言うので、

「ふうん、一合枰に半分くらい？」と重ねて聞いたところ、
実にイヤーな顔をされた。

新潟県人に、この質問はしない方がいいです。

『北越雪譜』（鈴木牧之）に曰く。「凡日本国中に於て
第一雪の深き国は越後なりと古昔も今も人のいふ事なり。

しかれども越後に於ても最も雪深きこと一丈二丈におよぶは我住魚沼郡なり」「夜昼を知らず家雪にうづまりて日光を見ざる事十四五日」「旧冬の（略）掘除たる雪と春降積たる雪道路に山をなすこと（略）家よりも高きゆゑ」云々。巨大な食パン（のような雪の塊）が家の前にでんと居座つていて足元を小人のような人間が行き来している挿絵がシチュールである。

雪が降れば思い出す 二

昭和の終り頃、戦前の生き残り、といった古い建物で勤務していた。窓は、鉄枠で、所々歪んでいる。すきま風がひどく、雨の時は要注意、というシロモノであった。

ある雪の朝、出勤してみると机の上に雪が積もっていた。窓から吹き込んだのである。室内で、積雪を見たのは、後にも先にも、この時だけである。

頭に浮かんだのは三好達治の「雪」という詩である。（多分）どなたもご存じと思う「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降り積む」というアレである。色々と解釈の余地がある作品だが、これを読むと、どうしてもハーンの「鳥取の蒲団の話」を思い出してしまふ。「幼い兄弟」「雪」「眠

り」という要素が共通しているせいでもあろうが、「蒲団」のラストが、悲しいながらも慈しみと静謐な美しさを湛えていて、それが「雪」の静けさと優しさに重なるからなのかも知れない。

雪が降れば思い出す 三

雪が降るとバスのダイヤが狂う。仮に来てても、満員通過はザラである。だから、学生時代は、雪の日は最初から歩くことにしていた。大体、三〇四十分くらい掛かったろうか。

JRで一駅の郊外校に勤務していた時、残業で、終バスも出てしまい、次の列車は一時間後というシチュエーション。雪はしんと降り積もる。タクシーを呼ぶも、何時になるか分かりません、とのお返事。

歩きましたよ、いつぞや書いたような性格ですから。直線距離にして約六キロ。さすがに、この時は一時間半、しっかり掛かりましたな。

足元は白く、目の前も白、真っ直ぐの道を延々歩き続ける内に、頭の中も心の中も真っ白になる。鼻歌ひとつ出てきやしない。ただ歩くのみ。歩くべし。ひたすら歩け、止

まると死ぬぞ、そう何かが命じているかのようだった。生体防禦反応かも知れない。蓋し、リングワンダリング（環形彷徨）に陥ったり、雪女に出会ったりするのは、こんな時なのだろう。

芥川は、漆を塗ったような闇を「黒洞々たる」と形容したが、雪で真っ白になる様は「白皚々（はくがいがい）たり」と言う。まるで対で考えられたかのような言葉だ。

ちなみに、翠藍こと桂國寧は『雪華図説』の跋文中に讃を寄せて、「如絮如花集小園。霏霏密密又翻翻。飛空處致空中潔。（以下略）」と詠んだ。

「霏霏」「密密」「翻翻」は雪の降る様を表した疊語である。『北越』の著者は「雪の飄々翩々たるを覩て花に諭へ玉に比べ（略）賞翫するは」と書いているが、これは「雪の浅き国の楽み也」と皮肉っている。「幾丈の雪を視は何の樂き事かあらん」と。

いかさま寒い。

（冒頭の「二合枡」云々の意味する所は、一合は

十勺。「勺」と「尺」を掛けた洒落である）

鳥取あれこれ その九十

内田 克彦（地域研究家）

「日本の学校の創立者」である鳥取出身者たちの一人として、今回は「京華学園」の創立者である磯江潤を取り上げる。名前を知ったのは、一九三二年四月号の『大因伯』、「在学生三千、四十年の歴史を持つ京華学園 中學、商業女學校を貫く磯江校長の実行主義」の見出しが付く記事であった。『北條町誌』（一九七四年刊）に記述があり、『新修北条町史』（二〇〇五年刊）には更に詳しい記述がある。

磯江潤は、一八六六（慶応二）年に、伯耆国久米郡江北村（現、東伯郡北栄町江北）に生まれる。一八七二年、江北小学に入学、一八七九年七月、「私立擇善學舎」（同郡弓原村）卒業、一〇月に京都遊学、漢学を学ぶ。一八八〇年八月、「橋本塩麩塾」（大分県中津）で漢学、英語を学ぶ。一八八二年一〇月、上京、馬場辰猪などに英語を学ぶ。一八八六年五月、「成立学舎」で英語と漢文を教える（一八八九年一〇月まで）。

一八八六年九月、「哲学館」設立と同時に英語教授

及び幹事に就任（一八九七年六月まで）。一八八九年一月、「郁文館中学校」設立と同時に英語教授及び幹事就任（一八九七年六月まで）。

一八九七年七月、「京華尋常中学校」設立認可、主幹に就任、英語を教える。磯江が校長に就任したのは、一九〇三年九月、津田眞道校長の逝去による。

一九〇一年一二月、「京華商業学校」設立認可、翌年五月開校、主幹に就任。初代校長は前田正名。磯江が校長に就任したのは、一九〇三年五月。

一九〇九年一二月、「京華高等女学校」設立認可、翌年四月開校、校長に就任。

一九三四年一二月、終業式終えて帰宅後、脳溢血のため重体となる。以後、療養生活に入る。翌年六月、長男泰雄、大蔵省を退官、三校の副校長の校務に専任。一九四〇年一月一八日、逝去。染井墓地に納骨。

『北條町誌』に、「その生家は、磯江家の東京移住によって、畑地と化した。今の江北本村の伊藤医院の道をへだてた西隣り〔略〕山茶花の生垣にかこまれた一基の碑がある。碑面には『磯江家累代之碑』と刻まれ」とあったので、一昨年、住宅地図をもとに訪ねてみた。伊藤医院の跡地に

はソーラーパネルが設置されており、「碑」は中部地震の影響だろうか、残念なことに倒れたままであった。

昨年六月、齋藤祐一『明治・大正の文学教育者 黒澤明らが学んだ国語教師たち』が発刊された。「旧制京華中学などで国語教師を務めていた十五名の人物」を取り上げている。その中には、鳥取出身の人物も記述されている。

まず、細田謙蔵。「剣と書と漢学を究めた漢学者」とある。一八五八（安政五）年に、伯耆国北谷村福富（現、倉吉市福富）に生まれる。師範学校附属伝習所で山内篤処に学んでいる。同著に、その生涯が詳しく書かれているので、省略する。文部省の習字科検定の委員なども務めた細田は、各地で立碑の話が持ち上がると、撰文や揮毫を求められており、「打吹公園碑紀」「紀榮碑」や「倭文神祠脩造記碑」「永江君頌德碑」「山内篤処翁碑」があるようだ。

次いで、山根勇蔵。「台湾日本語教育と民族探訪の先覚者」とある。一八七〇（明治三）年、気高郡松保村大字布勢（現、鳥取市布勢）に生まれる。兄吉次郎は一九〇一年から五年間、松保村の村長。西澤之助が編集していたあとを受けて、『女鑑』第二八号（明治二五年十二月）から第

一三二号（明治三〇年五月）まで、編集人を務めた。当時、高等師範学校の学生であったが、一八九六年に国語・漢文専修科を卒業後には、さらに研究科に進み、一高の教授を兼ねていた芳賀与一のもとで国語の発音の教授法などを学んだ。そして、一八九七年四月に、国語学校の教師として台湾に赴任する。一九〇〇年帰京。

国語伝習所で教えを受けた当時京華中学の教師であった平田盛胤の紹介で、一九〇〇年一月から京華中学に務めていた福島四郎が、五月に創刊した『婦女新聞』に専念するため九月に退職することになり、後任を探していた平田と芳賀とのつながりにより、山根は務めることになる。

因みに、平田盛胤は、篤胤の門人の鍊胤（碧川篤実）が養子に入り、その子の延胤が早世したためその長女の以志の夫である戸澤盛定が平田家の家督を継いだものである。

また、小原要逸（山口県岩国市錦見生まれ）が教えた生徒には映画人が少なからずおり、一九二二～二七年に在籍した黒澤明の作文を称賛したことや、大阪の桃山中学から一九一五年に京華中学の二年生へ転校してきた碧川道夫が、五年生のとき寒いので教室にあった教員用の小机をストープにくべて停学処分を受けたことが記述されている。

八代日記

(四十五)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

十二月某日

ありがたいことに年末の出荷業務が立て込んだ。人手が足りないのでタイミーという短時間アルバイト募集のサービスを利用してみた。なかなか便利で数名がお仕事にいらしてくださり助かった。自分もこれを使って、日雇いの仕事に応募して食い繋いで生きていけるのではないかな早く主夫になりたい。などとシミュレーションしてみたが、まあ無理か。さておきそれでも経費にも余裕はなく、毎日利用できないので自分のサービス残業で息切れしながら乗り切る。

師走のバタバタのさなか、うっかり福岡でのライブを入れてしまい午後休をもらって福岡へ。福岡は日に日に大都会になっていく。が、街並みの福岡らしさってもんが一体何なのかもよくわからなくなっているような。しかし人が多い。ふだん八代の人出ばかり見ているので、商売上の羨

ましさがある。どの街に行ってもレコード屋や書店・古書店に寄る余裕がなく寂しい。

初めて同う「パブリックスペース四次元」というハコでのイベントだった。対バンも面白かったが時間がだいぶん押して、出番が23時くらいで眠くなってしまった。アンコールもいただき、ありがとうございました。福岡ではもっとライブがしてみたいが、あまり伝手がないので次はいつになるだろうか。

終演後、会場で少しだけビールを飲んで談笑し、宿に帰ったのが深夜2時くらいだったか(他のメンバーは会場を移動しての打ち上げに参加)。明日は始発で帰ってクリスマス業務。起きられるのだろうか。宿の暖房が効きづらく、とても寒かった。

十二月某日

無事に始発に乗り会社へ。クリスマスケーキのメイン出荷。製造も店舗もみんながんばった。残業も短めに済み、無事に終了。おつかれさまでした。引き続き暮れまでは土産菓子の出荷作業が続きそう。

十二月某日

大晦日。出荷やらレジやら何やらかんやら忙しくして

休みがない中で体力がすり減っており、明日の夜まで働けるのかものすごく心配。何より家族と年を越せないのが寂しい。寂しいばかりじゃないか自分。初売りの製品を準備し、現場の妙見宮へ出発。

紅白幕などを設営し夕方から販売開始。昨年より人の流れというか足取りが軽い感じ。

2024年元旦

売り場で年を越す。売り場での年越しもこれで三回目だったか。自分の入社当時より一人メンバーが減り、今年はおでんを温め晚餐。深夜2時くらいでいったん人手が途切れるので順番に仮眠をとる。車で寝るので熟睡できない。朝5時過ぎからまた販売。そのまま18時頃まで売り続ける。来年はもうできる気がしない。人員を増やさねば倒れる。

片付け後、高速道路で眠りそうになりながら何とか実家に寄る。おせちを少し分けてもらう。ゆっくり飲みたいがしばらく休めず。一月三日まで初売りに従事。よく商売した。

一月某日

成人の日のところの三連休が明けたくらいから、年末年始の忙しさが嘘のように仕事がち落ち着く。怖い。

今月はケバブのライブが三本入っているが、全て代打に任せて自分は欠席。毎週末ライブがしたい気分。

一月某日

坂口尚の『あつかんべー休』が大判にて復刊。読み始めたが大事なところが多すぎて先に進めない。

一月某日

熊本国際民藝館の展示「民藝―用の美6 郷土玩具」をみにいく。岡山の知人が「外村吉之助と郷土玩具」というテーマにてトーク。とても興味深い話だった。民藝館にはかなり貴重な所蔵品があり、まだ整理できていない図書資料が結構な量あるという。これからお手伝いに行けたらと考えているが、まずできることは掃除くらいだろうか。

ペラペラになりたいですか？

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

「日本の英語教育は終わっている。小学校、そして中高六年間をかけて学んでも、喋れるようにはならない。」

果たして、これは正しい批判だろうか。

指導要領によれば、小中高合わせて、五〇〇から千時間程度を学校の授業として英語を学ぶことになるらしい。しかし、アメリカの国務省による指標では、言語的距離のある日本語を英語話者が学ぶ場合、日常的なコミュニケーションを取れるようになるまで、韓国語、中国語、アラビア語などと並んで、最も時間がかかり、二二〇〇時間かかるそうだ。圧倒的に時間が足りない。一方で、スペイン語やフランス語では、同じレベルまでの学習時間は七五〇時間と言われている。

つまり、英語を学ぶという意味で、ヨーロッパ系言語の話者は有利である。その上、ヨーロッパでは、自分自身の母語、英語、それに加えて他のヨーロッパ言語を話せるという人も少なくない。EUの元では、政策として複言語主

義が取られ、第二外国語、第三外国語を学ぶことを奨励していることも大きい。

しかし、AIの隆盛により、自分で学ばなくとも、英文は生成できるようになった。そんな中で、外国語を学ぶ意味などあるのか。と言っている私は、英語科教員である。

残念ながら、私は語学の天才ではなく、英語ですらネイティブには及ばない。IELTSと呼ばれる英語能力試験も、四年ほど九点中七・五点を維持してしまっている。ネイティブ同士の会話を聞いたり、映画を字幕なしで観たりはできず、文章も型通りに書いてしまう。と言いつつ、一度も英会話教室に通ったことも、通わされたこともなく、英語で仕事をするようになったのだから、コスパのいい娘だ。

私の場合、英語についてのモチベーションを維持できた大きな理由の一つは、部活にあった。私がいたのは、「英語演劇部」だった。自分が好きな舞台のパフォーマンスと英語を流暢に喋りたいという欲求が重なった。洋画を観るきっかけにもなり、英語に関する文化への知識も深まった。つまり、私も学校の授業「だけ」で努力したわけではない。ある程度喋れるようになるには、それなりの時間と労力をかけなければいけないのだ。悔るなかれ。

そうやって、英語の世界でアイデンティティを築くこ

とで、日本の外にも可能性があるのではないかと感じられたことは、自分の成長にもつながり、いざという時頼れる保険にもなった。といっても、ペラペラにはなれない。

大学で履修していた第二外国語は中国語だった。劣等生ではあったが、最後に資格でも取ろうと、中国語の検定^{TOCFL}を受験した。基本的なコミュニケーションを測る三級の試験では、書取りで問われた漢字が「水」で、日本語話者の私は拍子抜けしてしまった。

振り返ると、漢字の文化を共有する中国語と日本語の距離は、英語と日本語のそれよりは近いとも言える。また、韓国語には漢字語と呼ばれ、日本語の熟語と同じような表現もある。もちろん、三つの言語は、発音や使っている文字も違う。しかし、言語的距離が近いことは明白だ。

現代の日本では、言語的距離が最も遠い言語から学び始め、大学受験・就職にまでつきまとう。そんなトラウマ的外国語学習体験を乗り越えることはできるのだろうか。

ペラペラになること。それは、身の丈に合わない大それた夢だ。ならば、私が外国語を学ぶことで欲しいものは何だったのだろうか。

英語以外にも、私がつまみ食いしてきた言語は多い。フ

ランス語、中国語、トルコ語、アラビア語、韓国語。それぞれのルールを知ると、不思議なパズルのようだ。例えば、トルコ語はイスラム教の関係からアラビア語と同じような語彙もあれば、西洋化の過程でフランス語も入ってきている。しかし、語順は日本語や韓国語に近い。新たな言語を知ると、英語だけではない別の世界の見え方の一端が垣間見える。そして、「あなたの文化を理解しようとしている」という姿勢の表明にもなる。一つの言語でペラペラになるという高邁な目標ではなく、それぞれの身の丈にあった目標を持って学ぶこと。それを助けることが、私自身が外国語を教える中でやりたいことかも知れない。

そんな時に出会った本が、ソウル大学国語教育科教授でもあるアメリカ人・ロバート・ファウザーによる『僕はなぜ一生外国語を学ぶのか』だ。日本語学習に始まり、学校でスペイン語を履修、日本で働いた後、今は学んだ韓国語を使って仕事をする作者。彼の言葉で締めくくろう。

「外国語は僕にとって世界を見る窓であり、生涯の同伴者だ。こんな窓と同伴者付きの人生は思った以上に素敵だ。一つよりは二つがいいし、多ければ多いほどいい。読者の皆さん、あなたも勇気を出してそんな人生を一緒に歩んでみませんか。」

折り折りの記



ドラメリア (座敷わらし)

一月は何をしていたのかと問われれば、冊子を作っていたと答える。ただひたすらに冊子を作り続けていたと。折って、折って、最後にパチン。わたしの二〇二四年はそんなふうに始まった。

『音信不通』作りはいつものことじゃないかと言われそうだが、前号(九〇号)は特別だった。発行人・N氏(この呼び方がクリステイカ屋新一のようで好みなので、あえてこう呼ぶ)の著書『町の本屋という物語』の発売に合わせた記念号だからだ。統一テーマを「わたしの定有堂」に設定し、普段の寄稿者に加えて定有堂に縁の人々にも原稿をお願いした。ミニコミ発行当時のエピソードあり、定有堂ビル本人(?)の回想あり、と面白い中身になったと思う。

中身についてはいい。問題はガワ作り、物理的な製本作業のほうだった。実際の作業を見た人に「思ったよりずっと手作業なんですね」と言われたことがある。まったくそのとおりで、機械がしてくれるのは印刷まで、その後の作

業はすべて人力だ。A4の紙を二つ折りにして、印刷ミスや落丁に注意を払いながら組み、最後に中綴じホッチキスで綴じる。以下繰り返し。

イベントや店頭配布などと合わせると今回は普段の四倍近く量産せねばならない見込みだったので、編集部二人だけでの作業は早々に諦め、懇意にしている食堂の人たちや読書会に來られているTさんなど、ほうばうに助っ人をお願いした。

折って、折って、また折って、パチン。一連の決まった作業でも、ビシリと中綴じをキメるTさん、折り目の美しいSさん、なぜかパン生地のように台で冊子をこねるMさんと十人十色。お喋りしながらの作業は楽しく、わたしにとっても記念の号となった。

・編集後記:

シヨコラの季節。「シュガーバターの木」の期間限定「華やかに香るカカオ」がマイブーム。中のチョコが甘すぎず美味しいんです。通年で食べたい。

ドラメリア (編集長)

三砂慶明さん編集『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』の推薦文を、果報にも『本屋Mint』の辻山良雄さんからいただきました。作品社・ネット書店に全文が掲載されています。

奈良敏行 (発行人)